

目的 昭和45~47, 50~52年(第4報, 第6報)で高校「家庭一般」の学習内容に対する生徒の興味について調査し、「学習前」と「学習後」ではどのような変化を示すか、一対比較法により都市と農村の両地域で比較検討した。先の2回の調査に続いて今回も同様な調査を実施し、さらに3回の調査をまとめて、10年間における生徒の興味の変化の傾向を明らかにした。

方法 「学習前」は昭和55年4~5月、「学習後」は昭和57年3月に広島県の都市と農村の高校2校ずつ計4校の1年, 2年の生徒(2年生までに4単位履修)952名を対象に、前回の調査用紙をそのまま用いて、同様な調査方法で実施した。

結果 今回の調査で学習したい内容の順位は、①おま・きらいの両極端が都市と農村で一致しているが、中間ではその順位は異なる。②都市・農村ともに「学習前」に興味が高かったのは献立作成、調理実習、乳幼児の食物、育児と結婚などで、低かったのは予算生活、購入と消費、住居の衛生と安全であり、「学習後」でもこの傾向に変化はなかった。過去、10年間の興味の変化傾向を4校の平均によって検討すると①「学習前・後」とともに主として食物、乳幼児関係の内容に対する興味は年とともに上昇した。②「学習前・後」とともに生活時間の計画、被服製作、住居の管理と美化などの興味は年とともに下降した。なかでも被服製作は3回目の調査で、著しく下降し製作をらしいの傾向が目立った。③同じ「学習前」に下降した内容でも「学習後」無変化の内容もあった。④「学習前」無変化の内容は、「学習後」も無変化であった。